

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284030

研究課題名(和文) 東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態

研究課題名(英文) Modes of Representing Sacred Sites in East Asian Buddhist Art

## 研究代表者

稲本 泰生 (INAMOTO, YASUO)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：70252509

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,800,000円

研究成果の概要(和文)： 仏教の聖地に関する遺跡・遺物や事象についての現地調査を中国・インドで行い、蓄積した資料(主に画像)を活用して、その東アジアにおける様相の検討に取り組んだ。あわせて課題に関するテーマで3～4名の研究者が発表を行うワークショップを各年度に開催し、10名の発表者による10編の論考をまとめて、最終年度の3月に課題名と同題の成果報告書(全244頁)を刊行した。また国内では五天竺図(中世日本のインド地図)の研究を法隆寺での原本調査などを通して進め、同時に文字部分の翻刻作業を行った。その成果については期間終了後に論考を付した資料集として刊行する準備を整えたが、一部は上記報告書にも盛り込んでいる。

研究成果の概要(英文)： Modes of Representing Sacred Sites in East Asian Buddhist Art is the result of fieldwork at Buddhist sites in China and India and the study of Go tenjiku zu (Illustration of the Five Indian [Regions]), a medieval Japanese map of India. Ten Japanese researchers accumulated data (primarily photographs) to study the ruins, artifacts, and historical events of sacred sites in China and India and held annual workshops over a period of three years. Each year, three or four of the researchers presented their findings based on a given theme. At the same time, a study of the Go tenjiku zu was made at Horyu-ji Temple in Nara, while work on reprinting its inscriptions was undertaken. This publication (in 244 pages) is a compilation of the workshop papers and also includes a portion of the data gathered from the Go tenjiku zu research project.

研究分野：東アジア仏教美術史

キーワード：美術史 聖地表象 東アジア 仏教美術

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 東アジアの仏教史においてインドの仏蹟、釈迦滅後の衆生救済を担うほとけ(観音など)が現れるという場所、靈験をおこす仏像や聖遺物の所在地などの「聖地」は、憧憬・巡礼の対象にとどまらず、特定の個人ないし社会集団(信徒組織・宗派から王朝に至るまで)の権威・正統性の根拠や存在理由を与える役割をも果たし続けた。また「そこに見立てられる」「同等の聖性が移植された」場が創出され、聖地が増殖するという現象もしばしば生じた。こうした聖地にまつわるイメージは「東アジアの仏教徒における空間表象・時間表象」の本質に関わる事象であり、当該地域の仏教美術のあり方にも、様々な形で影響を及ぼしてきた。かかる問題意識に立った調査研究は、当該地域の仏教美術の特徴を深層から把握する上で、多大な貢献を果たすものと予測された。

(2) 研究代表者はこれまで、中国唐代及びその並行期の日本における、仏教的な聖地観念の核心にふれる以下の諸事象を、実作品に即して検証・究明してきた。

A. 聖地の中核を形成することが多い、インド由来と信じられた瑞像や聖遺物にまつわる伝承・図像の伝播とその意味。

B. 南海の補陀洛山に住まうとされる観音菩薩の表象と仏教的世界観の関係。

C. 釈迦が『法華経』『金光明経』を説いたとされるインドの靈鷲山が、釈迦像を前に行われる儀礼の中で表象され、その場が「聖地」性を帯びた空間と化す仕組み。

また代表者は平成24年4月まで十三年間在籍した奈良国立博物館で「平城遷都1300年記念 大遣唐使展」(2010)をはじめ、多数の展示会の運営に携わった。その過程で「仏教の聖地」に関わる多様な出陳品の調査研究にも従事してきた。

(3) わが国における仏教美術研究の場では近年、中国の五代十国～両宋期に対応する時期を中心に、「東アジアにおける文化交流」という視点がますます存在感を強めている。それは日本史の専門家による対外交渉史研究の成果に触発された部分が多い。

また中国美術史研究の側でも、当該期の宮廷をめぐる仏教関連文物の意味とその日本への波及の様相が、急速に解明されつつある。

いずれの場合も日本人僧の入宋などを介して伝達された、虚実入りまじった聖地関連情報に対する注目が、研究に奥行きを与える原動力となっている。

以上の研究動向及び代表者のこれまでの蓄積と経験に鑑み、専門領域を異にする研究者を組織し協働することによって、仏教美術の聖地表象に関わる諸問題を考究する機が熟していると考えた。これが本研究を構想する動機となった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主眼は、東アジアの仏教美術において、「仏教の聖地」と作品の間に結ばれた関係の構造を包括的・体系的に究明し、歴史的に跡づけることにある。この試みを通し、●当該地域の仏教美術の本質を、深層から把握することに資する。

●仏教文化の普遍性と地域性の関係を明確化する、一つの指標を示す。

●仏教信仰に内在する視覚表象の問題と美術作品の関係など、美術史学・視覚文化論研究の新たな方向性を示す。

などの達成を目指した。

主たる対象は中国唐～宋代に対応する時期の絵画・彫刻作品であるが、聖地イメージの造形化に直接関わる事例のみならず、「像を手掛かりに聖地をイメージする」実践や、「その場を聖地とする」とされた像など、広義の「聖地性」に関わる事例も含める。これらに文物・文献の両面から検討を加え、研究を進めることとした。

(2) 設定した目標についてより具体的に説明すれば、以下ようになる。

A. 「仏教を介した東アジアの文化交流」という観点から、仏教美術における聖地表象の様相の地域による共通項・差異を動的に把握し、歴史的に跡づける。僧侶の巡礼・往来が聖地表象のあり方に与えた影響、聖地表象における真景と虚構の関係については、特に重点的に検証を行う。

B. 仏教特有の世界観や時間の観念、王権論などと美術作品の関係にも注目し、聖地を表象する主体が属する階級(出家か在家か、権力者か民衆かなど)や共同体のあり方(例えば宗派)が、仏教美術における聖地表象に及ぼした影響について検討を加える。

C. 中国唐～宋代に対応する時期の事例を扱うが、必要に応じて近代日本における仏教美術の制作や仏教美術史研究に伝統的な聖地観念が与えた影響など、将来の研究につながる問題提起を併せて行う。

## 3. 研究の方法

(1) 上述の目的に沿った研究を効果的に遂行し、可能な限り広範囲にわたる問題をカバーできるよう、研究分担者・連携研究者・研究協力者を選定して研究組織を構成し、それぞれの所属機関や専門分野に応じて配置した。「博物館を拠点に仏教彫刻・絵画の研究に従事している者」、「文物を介した文化交流史の視点から、東アジアの仏教美術の調査研究に従事している者」、「美術史学以外、ことに考古学・仏教学の観点から出土資料や仏教文献の扱いについて助言できる者」などがその内訳である。

(2) 京都大学人文科学研究所を拠点として、本研究課題に関係する文化財に関する既存の資料(写真資料・調査記録・関連文献など)

の蒐集・整理・体系化を行うとともに、未収蔵の資料（図書・雑誌などを含む）の購入などによる補充を行い、研究拠点としての機能の充実を図った。資料の作成整理には、必要に応じて美術史学を専攻する大学院生などに研究補助を依頼した。

(3) 当該テーマに関連する文化財のうち特に重要な国内所在作例を抽出し、所蔵者や寄託先と調整協議のうえ、実査を行うこととした。主たる調査対象として、法隆寺「五天竺図」など東アジアにおける「インドの聖地」「釈迦関連の聖地」の表象に関わる作例に焦点をあてた。調査の中心となるのは熟覧・調査作成・写真資料の収集などで、並行して学界の共有財産たりうる質の高い基礎資料の集積・公表に向けた作業を行うこととした。

(4) 本研究を遂行するための資料蒐集を効果的に行うべく、各年度のべ10名程度を中国に派遣（5名程度の調査団を二回組織）する計画を立てた。調査対象に選定したのは、①聖地の中核となった聖遺物・霊験像などに関わる遺品。

②聖地を描いた絵画（五台山図など）。

③おかれた場を聖地表象の場に転ずる像（ブッダガヤの釈迦像の写しなど）。

などである。主な調査先に選定したのは①に関係の深い江蘇省・浙江省の寺院と博物館、③に関係の深い四川省の石窟寺院（広元石窟・大足石窟など）などである。また東アジア仏教美術における聖地表象の特徴をより明瞭に捉える上で必要と判断し、仏蹟などインドの聖地の踏査を実施することとした。

(5) 研究体制に所属する各研究者は各自の専門分野、及び(1)に示した研究組織における役割に沿って、「研究の目的」に掲げた諸問題の考究にあたる。これは個人単位で常時行うのが基本であるが、問題意識の共有を徹底して相互に活発な情報交換を行い、組織全体で実りある研究の推進に努めることとした。また少なくとも年一回は海外で活躍中の研究者による報告を含む「国際研究集会」を行うこととし、当該テーマをめぐる議論の深化と活性化を図った。

#### 4. 研究成果

(1) 東アジア仏教美術における聖地表象というテーマに関係の深い作品群や遺跡を選定し、これらを対象に国内外で調査活動を展開し、蒐集した資料（主に画像）の蓄積と整理及び検討にあたった。これが三年間に及んだ研究の支柱である。その中で特に組織的に取り組んだもの、及び顕著な成果を挙げたものを以下に列挙し、経過と実績を示す。

(2) 25年度から26年度にかけ、中国浙江省において、遺跡・遺物調査を実施した。25年10月、同省杭州市の浙江省博物館で開催中の

特別展「遠塵離垢—唐宋時期的く宝篋印経>」出陳品を中心に予備的な調査を稲本が行った。これをうけ、年度をまたいだ26年4月初に計8名からなる調査団を組織し、10日間にわたって現地に滞在した。調査地は浙江省博物館、白塔、六和塔、雷峰塔、飛来峰、靈隱寺、烟霞洞（杭州市）、阿育王寺、天童寺、南宋石刻博物館、延慶寺、天寧寺、天封塔、保国寺（寧波市）、普陀山（舟山市）、新昌石城山石窟（紹興市）、天台山、靈石寺塔、巾山塔群（台州市）、温州博物館、白象寺、江心寺、慧光塔、観音寺石塔、石馬山石刻（温州市）である。一連の調査で中国を代表する仏教の聖地である普陀山及び天台山、日本人行歴僧の事蹟や将来美術とも密接に関わる研究資料を蒐集・整理し、呉越～南宋時代の東アジア海域交流と仏教美術の関係にまつわる問題について検討を加えた。その成果は及び後掲(8)の報告書（「図書」①）の⑥西谷論文、⑧清水論文、及びに後掲「雑誌論文」⑥の清水論文、②の西谷論文にも反映された。

(3) ついで27年2月、インド東北部において、特に仏蹟に重点をおいて現地調査を実施した。調査団は計5名、調査日数は12日間に及んだ。調査地はサヘート、マヘート、ガンワリア、ピプラフワー、ルンビニー、ティラウラコット、クシナガル、ケッサリア、ヴァイシャリー、ナーランダー、ラージギル、ボードガヤー、サールナートの遺跡、及びラクナウ博物館、ヴァーラーナーシー・ヒンドゥー大学博物館、ニューデリー国立博物館である。この調査では東アジアにおける「聖地の表象」「聖地と結び付けて崇敬された美術作品」と、そのインドにおける実状、この両者の共通点と懸隔を見極めることを重視して資料の蒐集・整理にあたった。比較の視点から聖地表象の問題をとらえる上での展望を得た。その成果は及び後掲(8)の報告書（「図書」①）の②稲本論文、③田中論文、⑦谷口論文にも反映された。

(4) 27年度は二度の海外調査を行った。第1回は8月から9月にかけての12日間、中国四川省において実施した。調査団は4名。調査地は広元皇澤寺、同千仏崖、昭化漢城博物館、鶴鳴山石窟（広元市）、梓潼臥龍山石窟、西崖寺石窟、平陽府君闕、碧水寺石窟（綿陽市）、夾江千仏崖、樂山大仏、麻浩崖墓（樂山市）、北周文王碑、四川博物院（成都市）、安岳石窟（臥仏院・円覚洞・千仏寨・玄妙観・華嚴洞・毘盧洞、資陽市）、大足北山石窟、宝頂山石窟（重慶市）。当該地域に多数のこの唐代の釈迦・阿弥陀瑞像を、重点的に調査した。蒐集・整理した資料をもとに、インドの聖地にあった像に由来するとされる図像の東アジアへの波及の様相について、検討を行った。その成果は後掲「雑誌論文」①の田中論文にも反映された。

(5) 27年度第2回の海外調査は12月、9日間にわたって中国江蘇省を中心に実施した。調査団は6名。調査地は上海博物館、南翔寺（上海市）、瑞光塔、蘇州博物館、保聖寺、虎丘雲岩寺（蘇州市）、甘露寺、鎮江博物館（鎮江市）、石塔寺、大明寺、煬帝墓、揚州博物館（揚州市）、南京博物院、六朝博物館、大報恩寺、南朝王侯墓、棲霞寺、靈谷寺、南唐二陵など。入宋僧の訪問地、及び江南に拠点をおいた歴代王朝の舍利莊嚴にまつわる遺跡・美術工芸品に重点をおいて調査にあたり、蒐集・整理した資料をもとに、王権・舍利信仰・聖地表象の相関性という観点から考究を行った。その成果は後掲(8)の報告書（「図書」①）の②稲本論文、後掲「雑誌論文」②の西谷論文にも反映された。

(6) 国内所在作品の調査研究では、研究組織の各人が個別に行ったもの以外では、鎌倉時代の日本で制作され、インドの聖地を図式的に表した「五天竺図」を対象に行った研究が重要である。特に諸本のうち最も重要な一本である法隆寺甲本については、所蔵者との調整を経て27年11月に原本調査が実現し、5名が参加して法隆寺寺務所で文字の判読や細部表現等の確認にあたった。

これと並行して同図の写真資料の蒐集・整理、及び大学院生の助力を得て文字部分の翻刻を進め、研究期間内にこの作業を完了させた。同図研究の成果は、論考を付した資料集として研究期間終了後の刊行を目指している。現在出版に向け準備中であるが、すでにその一部は後掲(8)の報告書（「図書」①）の⑦谷口論文にも反映されている。

(7) 国内外での調査のほかに行った研究活動としては、三年間の研究期間中各年度一回ずつ、京都大学人文科学研究所を会場として実施したワークショップが挙げられる。各回とも仏教美術研究の第一線で活躍中の海外在住研究者を1名招聘し、計3～4名の研究者が発表を行う国際研究集会として企画した。各回とも30名前後の参加を得て、活発な討論が行われた。

第1回は26年3月22日、米国から招聘したインド美術の専門家・島田明氏（ニューヨーク州立大学准教授）による南アジア初期仏教美術における聖地表象と仏伝図の関係を扱った報告、研究分担者の谷口耕生及び研究協力者の西谷功による宋元時代並行期の東アジアにおける聖地表象の問題を扱う報告が行われた。

第2回は27年3月28日、英国からインド美術の専門家、マイケル・ウィリス氏（大英博物館主任学芸員）を招聘して実施し、同氏による釈迦成道の地・ボードガヤー遺跡に関する研究報告が行われた。ほか連携研究者の田中健一及び増記隆介氏（神戸大学大学院准教授）により、インド・中国を各々代表する聖地である靈鷲山・五台山の東アジアにおける

表象の問題を扱う報告が行われた。

第3回は27年12月23日、ドイツから外村中氏（ヴュルツブルグ大学）を招聘して実施し、同氏によって東大寺大仏蓮弁に現れた仏教的世界観を包括的に検討する報告が行われた。本報告では東アジア仏教美術における聖地表象の基盤をなす仏教の世界観の様相が明らかにされた。ほか研究代表者の稲本、分担者の上川通夫、連携研究者の清水健の3名により、中国・日本の仏教及びその美術の聖地観にまつわる事象を検討する報告がなされた。

(8) 最終年度末には、三年にわたって行った研究のひとつの総括として、計三回実施したワークショップで発表した研究者計10名の執筆による論考（発表テーマもしくは関連テーマ）をとりまとめ、研究成果報告書『東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態』（総244頁）として刊行した。各篇の題目とタイトルは以下のとおり。

①須弥山世界に関する諸説と東大寺大仏蓮弁須弥山図について（外村中）、②五～七世紀東アジアの本生図に関する覚書―「本生処」「布施」「超劫」をめぐる言説と主題選択の接点―（稲本泰生）、③日本古代における靈鷲山表象―長谷寺銅板法華説相図を中心に―（田中健一）、④日本史上の『大般若経』（上川通夫）、⑤五台山と金峯山―「応現観音図」からわかること―（増記隆介）、⑥南宋時代における普陀山観音信仰の展開とその造形―泉涌寺伝来観音菩薩坐像を中心に―（西谷功）、⑦五天竺図と中世南都の仏教世界観（谷口耕生）、⑧垂迹する聖地―中世日本の補陀落山表象の諸様態を例として―（清水健）、⑨ボードガヤー遺跡―菩提樹から寺院へ―（マイケル・ウィリス、内記理訳）、⑩インド古代初期仏教美術における聖地表象―仏伝図との関係を中心に―（島田明）。

(9) 研究組織に属する者が個別に発表した関連領域の主な発表論文等は後掲のとおりである。このうち「研究目的」の項で言及した近代東アジアにおける仏教美術と聖地表象の関係にまつわる成果としては、中野慎之（研究協力者）による論文（後掲「雑誌論文」③）及び稲本泰生による評伝「利他と慈悲のかたち―松本文三郎の仏教美術観」（後掲図書②掲載）が、近代日本におけるインド世界の表象と画壇・美術史研究の関係を扱っている。またウィリス論文（上掲研究成果報告書、後掲図書①所載）も、インド内の状況であるが、ボードガヤー遺跡の整備の様相にまつわる内容を含んでいる。

##### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計11件）

①田中 健一、橘夫人念持仏における日本古代の他界観、他界観—東西文化が紡ぐ「あの世」のイメージ、大阪大谷大学歴史文化学科調査研究報告書、2巻、査読無、2016

②西谷 功、泉涌寺旧蔵「涅槃変相図」とその儀礼の復元的考察—鎌倉時代における宋式涅槃儀礼の受容、仏教芸術、査読有、344巻、2016、54—85

③中野 慎之、明治後期の日本画における仏教—岡倉覚三の構想と観山・大観・春草—、京都府埋蔵文化財論集、査読有、7巻、2016、355—378

④竹浪 遠、宋代文人士大夫の詩文集にみる絵画関連資料 北宋編2、古文化研究、14巻、2015年、1—77

⑤谷口 耕生、清凉寺釈迦如来立像旧厨子扉絵考—金光明懺法諸天図の一遺例—、仏教美術論集（竹林舎）、査読無、5巻（機能論—つくる・つかう・つたえる）、2014、372—397

⑥清水 健、海住山寺本堂旧壁画試論、仏教美術論集（竹林舎）、査読無、3巻（図像学Ⅱ—イメージの成立と伝承（浄土教・説話画））、2014、326—347

⑦竹浪 遠、宋代文人士大夫の詩文集にみる絵画関連資料 北宋編1、古文化研究、13巻、2014年、121—193

⑧田中 健一、研究資料 蒲州大雲寺涅槃変碑像造像記、大阪大谷大学文化財研究、14巻、査読無、2014年、56—59

⑨稲本 泰生、隋唐期東アジアの「優填王像」受容に関する覚書、東方学報、88巻、査読有、2013、111—149  
<http://dx.doi.org/10.14989/180573>

⑩石川 知彦、大峯山で祀られた尊像—如意輪観音三尊像をめぐる—、山岳修験（日本山岳修験学会）、査読有、52巻、2013、48—61

⑪西谷 功、鎌倉時代における泉涌寺流の道場荘厳について—仏画の宗教的機能、密教図像、査読有、32巻、2013、38—61

〔学会発表〕（計6件）

①稲本 泰生、平城遷都以前の塑造と埴仏、奈良国立博物館夏季講座（招待講演）、2015年8月18日、奈良文化芸術会館（奈良県奈良市）、

②谷口 耕生、一遍聖絵を旅する、県博セミナー（招待講演）、2015年11月29日、神奈川県立歴史博物館（神奈川県横浜市）

③稲本 泰生、七～八世紀東アジアにおける「優填王像」の波及—儒仏交渉史上の意義を中心に、龍谷大学史学会大会、（招待講演）、2014年10月17日、龍谷大学大宮学舎（京都府京都市）

④上川 通夫、平安京と仏教—アジア・京・山寺—、日本史研究会例会（招待講演）、2013年11月30日、京都機関紙会館（京都府京都市）

⑤石川 知彦、日本の仏画に描かれた”巡礼”、日本宗教民俗学会第23回大会シンポジウム「円環する祈り」（招待講演）、2013年6月8日、大谷大学（京都府京都市）

⑥稲本 泰生、浄土信仰史上の当麻曼荼羅、学術シンポジウム「綴織当麻曼荼羅」（招待講演）、2013年4月27日、奈良国立博物館（奈良県奈良市）

〔図書〕（計6件）

①稲本 泰生（編）、京都大学人文科学研究所、東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態、2016、244

②稲本 泰生 他、研文出版、清玩—文人のまなざし（京大人文研漢籍セミナー5）、2015、214

③上川 通夫、吉川弘文館、平安京と中世仏教：王朝権力と都市民衆、2015、235

④稲本 泰生、塚本 麿充、西谷 功 他、小学館、日本美術全集 6 東アジアのなかの日本美術（板倉 聖哲編）、2015、294

⑤上川 通夫 他、関西大学出版会、日本古代中世の仏教と東アジア（原田 正俊編）、2014、348

⑥船山 徹、岩波書店、仏典はどう漢訳されたのか—スートラが經典になるとき—、2014、320

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

稲本 泰生 (INAMOTO, Yasuo)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：70252509

### (2) 研究分担者

岡村 秀典 (OKAMURA, Hiidenori)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：20183246

船山 徹 (FUNAYAMA Toru)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：70209154

上川 通夫 (KAMIKAWA, Michio)  
愛知県立大学・日本文化学部・教授  
研究者番号：80264703

谷口 耕生 (Taniguchi, Kosei)  
独立行政法人国立文化財機構奈良国立博  
物館・学芸部・教育室長  
研究者番号：80343003

(3) 連携研究者

石川 知彦 (ISHIKAWA, Tomohiko)  
龍谷大学・龍谷ミュージアム・教授  
研究者番号：20596613

浅見 龍介 (ASAMI, Ryusuke)  
東京国立博物館・学芸研究部・東洋室長  
研究者番号：30270416

大原 嘉豊 (Ohara, Yoshitoyo)  
独立行政法人国立文化財機構・京都国立博  
物館・学芸部・保存修理指導室長  
研究者番号：90324699

竹浪 遠 (TAKENAMI, Haruka)  
京都市立芸術大学・美術学部・講師  
研究者番号：70463445

清水 健 (SHIMIZU, Ken)  
独立行政法人国立文化財機構奈良国立博  
物館・学芸部・工芸考古室長  
研究者番号：80393370

塚本 磨充 (TSUKAMOTO, Maromitsu)  
東京大学・東洋文化研究所・准教授  
研究者番号：00416265

山口 隆介 (YAMAGUSHI, Ryusuke)  
独立行政法人国立文化財機構奈良国立博  
物館・学芸部・研究員  
研究者番号：10623556

田中 健一 (TANAKA, Kenichi)  
大阪大谷大学・文学部・准教授  
研究者番号：00611188

(4) 研究協力者

西谷 功 (NISHITANI, Isao)  
泉涌寺宝物館・学芸員

中野 慎之 (NAKANO, Noriyuki)  
京都府教育庁・文化財保護課・技師